

「紅樓夢」の会話に現われた 中国女性の「利害」について

渡 辺 尚 子

A 緒 論

1. 主 旨

かつて、中国に永く住み、あるいは中国人と接触の深かった人は、ほとんど必ず、その人間関係における中国人の底の深さを云々し、それにもまして、中国の女の強烈さ即ち「利害」に驚嘆して、こう言った。「彼女達は世界中で一番強い女である。表面はいつも従順そうに見えるが、決して屈服することはない。その女と並べると、中国の男は弱く見える。この女性の強さは、どこから生まれたものだろうか。それは数世紀の時間が彼女達に与えた強さであり、余計者とみられている者の強さだ。生まれた時に歓迎されるのは、いつも男児であり、……略……自分自身を守り、与えられないものを盗み、真実をいって痛い目にあわない為に嘘をいい、自分を守る楯として欺瞞を用いるようになったのだ。そして、普通の女性の場合には、自分の安全と喜びの為にそうするに過ぎないが……略……偉大な女性の場合には、その犠牲はなんと素晴らしくなることだろう。」¹⁾

この様に評された中国女性の特色は、彼女達の大小の日常行動として現われ、更にそれが、ことばとなって現われる時、直接間接に相手の、あるいは目的とする者の肺腑を指し貫き、そして、その最も程度の強いものは、見えざる行動聞えざる声となって、古来、そして今後ながく、歴史に社会組織の上に、あらゆる人間関係——ここでは、単に広い意味で——の上に、大きな影響を与え、また、与えようとしている。

こういう、中国女性の特色の一つを、「利害」と称してよいと思う。

いまここに、その中国女性のことばにあらわれた利害を、中国の古典、紅樓夢のなかで探求してみたいと思う。では一体、「利害」とは、どの様なことを意味するのであろうか。

2. 利害 (リーハイ) の意味

厲害、いまは厉害ともかく。li hai・リーハイと読むが、li—リイに力を入れ、hai—ハイは軽く発音する時、我々の使う利害の意味を離れ、以下の様な解釈となる。1. ひどい 2. 凶猛なる 3. きつい (性質)。²⁾ また a. 烈しい, きつい (風など)。b. 残酷な (人間が), きつい (口が) など。³⁾ また、中国人の使う辞書⁴⁾には、厲害はなく「厲」を勤勉也, 危也, 烈也, 嚴肅也, 惡也, 虐也, 殺戮不辜曰厲, 暴虐無親曰厲, 惡鬼也。…略。「利害」とは、大体、如上の意味を含む中国の常用語である。

3. 紅樓夢をとりあげた理由

(1) 小説紅樓夢は、我が国では源氏物語、あるいは、バルザックの人間喜劇、トルストイの戦争と平和など、世界有数の大小説に比べられる中国の代表的な大部な小説であること。⁵⁾

(2) 然も、源氏などより、更に広汎な中国人の上下層、特にまたより多く、民衆に熱愛された⁶⁾———ということは、とりもなおさず、中国民衆各個人の心を、即ち、彼等の言わんと欲するところや、当時の生活そのもの、人間関係のありのままを、代表しているからであって、現在の中国でも、「中国封建社会末期の百科全書である」。…略…「当時の社会が有する総ての基本的特色を具備している」。⁷⁾などと評されているものであること。

(3) またその構成が、欧米の長篇小説がしばしば一人の描写、あるいは作者の思想や意見を記述することで、作を進行させているのと違い、全篇の大部分が、二人以上の人物の交渉やその行動——の描写というより、ほとんどが会話を以て筋を進め、創られていること。

(4) 特にその会話は、中国人の言語表現上の特色をそのまま出していて、現代中国人自らも、「用語は簡潔・素朴・優美・活発で、鮮明な具象性を具え、表現力は極めて強く、我が民族の言語特色を発揚」とか、「我等民族の言語のニュアンス・風格を保持している」。⁸⁾などと評され、ま

たそれが、清朝乾隆時代の古い作であるにもかかわらず、作中の会話はそのまま現代にまで死滅するどころか、日常生活に広く使用され続けて来た上、⁹⁾ 更に特筆すべきことは、現在共産主義政権下において、また新しい意義を託され、同じそのことばが、新鮮な息吹きを以て、日常に使用され、新生中国の民衆鼓舞にまで用いられ、日本の新聞紙上にも、そのまま転用されていて、¹⁰⁾ ひいては我々の生活にまでそこばくの影響を与えているわけである。

(5) 主人公は男性ながら、彼を圍繞するあらゆる型の女性、即ち、性格はもちろん、年齢において幼女から老女の死に至り、その一大富貴の大邸宅内に生きる、絢爛たる女性群像を描いている様に見せつつ、一方貧しい庶民の女性をも随所に活躍させ、農民の老女、芸能界の女、尼僧まで、かなりの種類を点描し、その点、源氏の女性群像の書であることと似てはいるが、更に広く各階層に汎っており、しかも具体性のある彼女達の「会話」で事件の推移を語る場合が多いこと。

(6) 以上各項を総合する時、古典ながら紅樓夢は、従来中国女性のことばの特徴を探る上に、現在の私にとって、最も適切な材料であると考え。では、紅樓夢とは大体どの様な小説であろうか。

4. 紅樓夢の概説

(1) 題名解説 この作品は、他にも「石頭記」「情僧録」「風月宝鑑」「金陵十二釵」など、幾つかの題名をもつ。作中の縁起によっても、原名は実は、「石頭記」(石のことを中国人は普通石頭と呼ぶ)であったと思われ、中国の一般人には、往々、「石頭記」の方が、通りがよい。「石頭記」の方は、後述するように、その縁起により名づけたものであるし、「紅樓夢」という名称は、直接には、(1) 作中の第五回に、主人公宝玉が、紅樓——唐代以来、富豪の娘の居所をいう——即ち、秦可卿の寢室でまどろみ、夢に警幻天に遊んだことを指し、また同時に、(2) 同回中にある「紅樓夢曲」という曲名でもある。だが、実はそれは、同時に作者が、自身をモデルとして描き出そうとした世界——絶世の美男にして富豪の嫡孫たる賈宝玉の、絢爛豪華な閨閣における見果てぬ夢なのであ

る——ということを寓しているものであろう。

(2) 内容要約 発端は、甄士隱・賈雨村という——それぞれ中国発音で真事隱・仮語存と音を通わせている——二人の僧と道士が、大荒——中国発音の、大でたらめに通ずる——という山の、無稽——これも同様、中国発音に通わせ、根拠なしの意。以下、作中の人名・地名には、ほとんど何かの意味を持たせる通音を以て名づけてある。——崖の、青埂——情根に通わせてある——峯に捨てられていた大岩に頼まれて、法の力でその岩を宝の玉に変え、浮世の、栄えている国（モデルとしては当時の長安を思わせ、実は南京である）の、学問の榮譽も高い富貴の家（宝玉の生家榮国邸などを伏せる）の花柳繁華の地（宝玉一族の最盛時の活躍舞台、邸内の大観園などを伏せる）に在る、麗わしい女性達の住むほとりへ、生まれ出させる為に帯同して何処ともなく立ち去る。

年移り、空々道人なる者が彼の地を通り見ると、かの大岩の上には、彼が浮世へ生まれ変わって経て来た経験が、ぎっしりかかっていた。家庭の奥向きの細事から、徒然の詩の類まで、見事に揃って(80回と続篇40回)いるが、中心となるのは、宝玉が、金陵十二釵と呼ばれる12人の美しい姫君方に配するに、あまたの麗しい侍女達に囲繞され、栄華に過ぎた経緯である。とりわけ、絶世の美人にして才女の林黛玉という父方の従姉妹とは、互いに魂も抜ける悲痛な変愛に陥るが、封建宗法社会の周囲の意向、その他の為にはばまれ、そのため黛玉の病も改まり、悲恋にひとり哭死する日の宛も同時刻、宝玉の「玉」に配するに「金」の首飾りを持つ豊麗無比の母方の従姉妹、薛宝釵と、騙されて結婚させられる。やがて、その大岩のかたみの宝玉をくわえて生まれた宝玉の劫の尽きる日、彼は既に宝釵の胎内に子孫を遺し、生来本を手にするさえ好まなかった彼として、意外や挙人の試験に合格、その盛んな発表の人混みにまぎれ、漂然と去ろうとする。折柄、降りしきる雪中、はるばる探しに来た父には苦舟の舳に無言で拝礼。その鴻恩を謝し、漂々乎として冒頭の僧と道士に伴われ、色即是空と消えてゆく。大要以上の構想である。

(3) 作者紹介 姓は曹、名は霽、号を雪芹と呼ぶ。近年胡適¹¹⁾・周汝

昌¹²⁾その他によって、その身辺が明らかになって来た。1700年代の人。祖父が清朝の江南の要職に任ぜられ、以後祖孫三代、引続きその任に当り、康熙帝の信任も厚く、帝の江南巡狩の際には四度もその駕を迎えた。後、四代目の養子類の時職を追われ、家産没収の憂目を見、その後、遠からずして北京に移り住むこととなった。一説には、その作者の家系及び身辺の出来事を小説化したものともいう。但し、雪芹は約20年を費して80回までを書き、未完のまま、家計不如意の失意の裡に病歿。続篇40回は高鶚一字を蘭墅。紅樓外史と号す。旗人。1700年代の終期から1800年代の初めに60歳位まで生きたと思われる。(ないしは別人)の補作になるものであろうと言われる。この艶情の人高鶚によって完結されたという情艶の書紅樓夢は、たちまち、誰もが研究対象として選択に困る程、非常に多くの版本が出た。

(4) 諸版本略説 どの版本に依るかは、従来、紅樓夢研究に当り、諸先輩の考慮されるところであるが、今回は、俞平伯校訂の紅樓夢80回校本¹³⁾を主に、またところどころを、戦時中から手元に在り20年馴れ親んだ程偉元本系の、繡像仿宋完整本の古本紅樓夢¹⁴⁾を使った。

元來紅樓夢は、それが禁書として発禁の厄にあいながら、しかも民間に秘かに驚異的流行をみた為、版本が実に多く、現在100種以上を数える。脂硯齋本¹⁵⁾と呼ばれる写本系統のもの、戚本と略称される戚蓼生の序文のあるものは、¹⁶⁾共に80回の系統であり、略称を程甲本または程偉元本といい、¹⁷⁾また同様に程乙本¹⁸⁾と称される諸版は、120回本系統である。

これら諸版本の間には、かなりの異文が認められる。通行本である120回本には、後部40回が高鶚あるいは別人の補作と称される以外、彼等の手が全体的に加えられている。特に中国人の人間関係に大きく作用する対人称呼など、程甲本と乙本間の差異¹⁹⁾は大きい。この小論を通じての究極の目的が、小説など固定化したものの研究にはなくて、従来、中国女性の実生活——人間関係における性格「利害」の研究にある為、手を加えたとしても、その高鶚ないしは別人もまた、同じく中国人であ

り、その彼等が、作中の人物の会話として妥当とし、またそれを一般中国人が、涙を流して愛読、中にはヒロイン達を慕う余り、自身も病に斃れた男女も出るほど流布された諸版本であれば、やはりそれは中国人のありのままのすがたでもある²⁰⁾という考えから、版本については固執しなかった。そして個々の用語の異なる個所はその両方を繰り返し熟読の上、私自身、実際に経験して来た中国女性の実態から、前後の関連において、さもありなると思われる方のことばを採用して論ずることにした。終りに、本稿を理解しやすい為に、作中の主要人物の図解について一言する。

(5) 賈家家系および主な召使の図解　ことばの持ち味、また、それをきいた人の感ずるものの深さは、自然科学の実験の様に数値として出せず、各人が、自身の性格や感賞などを以て、また、事件の進行やその場のふん囲気等によって感得するものであるから、誰がどの様な位置において誰に向って、その発言をしたかが、そのことばを判断する上の大切な基礎的条件であり、先ずそれを理解して、そのことばの持つ味を吟味するその助けとして、宝玉の生まれた賈家の家系および、主な召使を、家族は世代、召使は階級別に図解する——図表²¹⁾参照。

図表の上半、家族欄において△印は故人を示し、×印は婚姻関係を、太字は金陵十二釵を現わす。下半ページ、召使欄の従列は、それを上欄の家族の所まで、見上げていった所に位置する家族づきであることを示す。ことば榮国邸の賈家の当主は政であり、奥方王氏との間の嫡男が宝玉で、その第一の附人は乳母の李氏であることを示す。李媽々の属する段は非常に高い召使クラスで、時には、世代の下位に在る家族達へは、命令口調もつかうことがゆるされる。その下の段は、仕える主人が男性であれば、将来公然の側室にも擬せられる侍女の第一人者であることを示し、この従列の場合は襲人である。次が階級的には同位にあるけれども、自然に重んぜられている順は、晴雯・麝月・秋紋等女性の召使群である。男性召使第一位で、賈家の家令周瑞と雖も、宝玉の居室に自由に出入し、身の世話をする彼女等4名にはかなわない。だがそのやや下に在る李貴が、門外には出歩かぬ女性群に代わって、いわば、宝玉個人

の番頭的存在であり、かむろ的年齢の女性召使い、芳官・小鶯・四兒は、女性と雖もその下に位する。彼女達は宝玉の居所づきではあるが、まだ原則的には、宝玉と直接口をまくことは許されず、従って、誰が重んぜられているということがなく、全く同位である。その下位にかかれる柳家的是、同じく賈邸に使われている劉の妻であり、女性で年配者ではあるが、呼ばれなければ、自身勝手に宝玉の居室はもちろん、次の室にも出入出来ない。茗烟また同様、宝玉とは年齢が近く、極く親しい秘書的存在の茗烟ではあるが、男性である為、その居室のある棟の内には、呼ばれた時だけしかはいることは出来ない。他の家族や召使の関係、総てこれに準ずる。

以上の様な封建的な、階級あるいは身分的の判別が不文律として厳存し、従って口のきき方にも、相互の身分をふまえて、正格的なことばで述べる時と、皮肉、あるいは深刻な憎悪・侮蔑・あてこすりなどの烈しいものを含んでいるが故に、故意に、破格的ないい方をしたり、²²⁾ 必要以上にその身分の違いを強調卑下した言葉づかいをしたりすることを、そういう慣習の少ないことばづかいに慣れた私共は、先ず用心してかからねばならない。

目 本 論

○ 凡 例

- a. 一語で数項目を兼ねていることばもあり、八項目の分類は、ただ便宜上、大体にすぎない。
- b. 他項目に属すべき語をふくみ、特にその二種の語の区別をはっきりさせたい時は、当該項目のことばには傍線を、他項目に属する語には傍点を付した。
- c. 第三・第八の項目は、会話全体のニュアンスで感ずべきものでもあるところから、傍線は省いた。

1. 対人称呼による利害 (リーハイ)

中国では日常の人間関係に、対人称呼の問題が大きく影響する。その特徴の一つであるが、中国語は、動詞に、いわゆる人称変化がない。それに

関連して、我々日本人の日常からは考え及ばぬほど繁雑な親族称呼——第2図、参照のこと——や、階級称呼・固有名詞が、代名詞同様使用され、動詞だけでは現わし得ない様々のニュアンス——輕蔑・皮肉・風刺・親近感・敬意や、またそれらの強弱を、巧妙に表現し、代名詞における階級や親族称呼の使いわけによる微妙なニュアンスの表現と相乗して、更に錯綜あるいは沈積する深刻な感情を現わし、利害の度を増減する作用をしている。

かつて大陸に日本人が多く住んだ頃、中国通と呼ばれる多くの日本人が、中国人の家庭に我が家の様に入出し、家族の誰からも笑顔で迎えられ、実に親し気に、家族として心を許されているかに見えた。然しそのほとんどが、実は当時の日本と中国の力関係の反映であり、あるいは、中国人一般の人間関係に対する老練さから来るものであり、多くは、あくまでも他所者なのであった。それは、対人称呼の使用一つをとりあげても立証出来る。

親戚の中国人が訪れた場合、訪問先の中国人家庭内の出来ごとが、その家族達それぞれの感想を混えて話題にされる。ところで、その場に居合わせる家族各人は、各自口をきく際、話中の人物を指すに当って、普通は話者からいって正格ともいふべき対人称呼を使うが、ある場合には、自己のそれに対する特殊な感情を併せ表現する為に、破格的な対人称呼を自在に混用して、ほとんど例外なしに人数の多い、その家庭の出来事を語る。訪問者は、次ぎ次ぎ入れ替わっては口を聞く家族各人に対して、自身のその家庭内における取り扱われ方の比重に適わしく、また、瞬間の相手に適わしい称呼を、その都度、判断しては使いわけ、合槌をうってゆく。訪問者側もその称呼の使いわけによって、時としてはただそれだけで、彼の、事件あるいは話中の人物に対する感情をも表現出来るのである。そういうことばの機微までわかって使いわけていた日本人が、一体、どれほどいたであろう。

かくて、我々外國人が、時には難解に感じた中国人の人間関係——そのなめらかな進行もまた、ことばの操作が、その出発点ともいふべき対人称呼一つにおいてさえ、かくも微妙に、また楽々と複雑に行使されていることによって、ゆるぎなく構成され、経過している。そこには、対人称呼の使用を、最初に探ってみる必要と価値が生じる。

では、それが「利害」(リーハイ)としてひびくのは、どの様な場合であろうか。先ずその対人称呼の内、親族称呼について調べてみよう。

a. 親族称呼による利害 (リーハイ)

例1 黛玉→襲人

「ねえ、お嫂さま、——(原文は嫂子—兄嫁の称。侍女の筆頭襲人は宝玉と肉体的関係においても、結ばれている筈である。それは、半ば公然でもある。だがまだ、お部屋様でもない。ここに微妙な人間関係が濫濫され、ことばの遣り取りも発生することになる。)——仰言って！ お二人で口争(いさかい)をしてなされたに定ってますわね。この妹に打明けて下されば、あなたがたの仲裁に入って上げますわ。」

襲人は(恐縮してちぢみ上らんばかり)黛玉を押しようにして、

「林(リン)の姫様、なんてことを仰言いますの！ 私なんぞ、たかが女中風情(ふぜい)でございますのに、姫様ったら、とんでもない事許り……」

「女中だなんて仰言いますけど、私、あなたをお嫂さまだと思ってるのよ。」

宝玉「あなたはなんだってまた、これに人間きのわるい名のつきかねぬ仕打をなさるのです？ (宝玉がこの様に口をはさまねばならぬ程、黛玉の「嫂さま」と呼んだ冗談はこの大邸宅内において、うるさい陰口をきかれるもとなる) それでなくても、はたでは、とや角言うのですよ。そこへもって来てあなたにそんな風に呼ばれたのでは、たまったものじゃないですよ。」

襲人も笑いながら「林の姫さま。あなたに私の心持ちがおわかりねがえないなんて！ ああ、この息の根が止まってくれるんであれば！ 死んだ方がましですわ。」

黛玉「あなたが死んだりなさろうものなら、他の人はいざ知らず、この私がまっ先に泣き死んでしまうでしょうよ。」——第31回

同じ破格的使用にしても、この黛玉の場合、利害なからかいであったが親族称呼の破格的使用は、また、阿諛であったり、何かの願いごとがあって呼びかける時に、巧みに使用されることが少なくない。(例は省略)

(なお、ここにも、「死」という敗しい語を、二人の女性が冗談にして共

に使っている。二項の「死」「殺」などに関する利害を参照のこと)

次に対人称呼の代名詞による利害な人間関係について探ってみよう。

b. 代名詞による利害 (リーハイ)

封建宗法制度下の中国家庭の、上下身分意識は格別である。そこに代名詞使用の意外な繁雑さが存在するわけで、利害な人間関係を招来することばとして見のがせない。

第一人称「我」は、原則上、誰が誰に対しても使用出来る。その複数を示す「我們」は、日本の古い「手前ども」と同様、下位者が長上に対し「我」の意でも用いるし、また次例の様な場合、日本でもよく女同志の嫉妬から、そのことばを種に虐めたりするので、特にわれわれ日本人には、利害なことばとして感得しにくい。けれ共、古い中国の封建宗法的の家庭生活や人間関係をふまえてそれが使用された場合、相手に与える利害の度合は、我々の想像以上のものがある。

では、踏まえてある中国の封建宗法的生活とは、例えばどんなものか。

例2によると、宝玉つき侍女の筆頭襲人は、家中の法皇的存在である後室から、その人柄を見込まれ、後室付きから抜擢、宝玉付きとなる。非常な美人でもあるところから、まだ少年だった宝玉にもひどく愛され、筆頭侍女として当然寢所を俱にして、身の世話に当る。当時正妻でない女性にもまた、種々な段階が顕存した。襲人の場合、寢所内の世話をするが、それはあくまで夜中の喫茶などの奉仕の為の、召使としてであった。宝玉が、雲雨の情を解するに至っても、彼女の愛情関係を他人に対して表面に出すことは、人倫にはずれるのであり、ただ一身を顧みず奉仕する誠実だけが、当然のこととして、要求される。やがて奥方——女性では後室につぐ権力者——が、宝玉の男となっていることを、襲人から聞き知り、「お前に託す」と言った時、次の食事から、彼女には、毎食二品が他の侍女より多く供せられ、銀二両の特別手当が、月給に添えられる。この時はじめて、彼女の女性的愛情は、邸中の女性から公認される。がまだ、当主の政には知らされず、従って襲人はまだお部屋様では無論なく、使用人である。例2はこの襲人の立場に関して、微妙にふまえて晴雯が突返んだところに、

外国人には看過されやすい、深刻な利害が存在する。

例2 襲人は騒ぎをききつけ、慌ててやって来るなり、宝玉に、

「そんなわけもなしに、どうなさったっていうんでしょう？ほんとに私の申すとおりの。一寸わたくしが目を離すと、もうことが始まるんですから。」

晴雯はこれをきくとせせら笑い、

「お姉さま、それだけのお口が利けるんですもの、早いこと来て下さればよかったです。……(以下随分皮肉を云々する)…略…。」

襲人は腹の虫をこらえ、

「晴雯ちゃん。あんた、遊びにいったらっしゃいな。もともと悪かったのは私達なんですから」

晴雯はこの『わたくしたち』をききとがめた。

「さあ、私には解りかねますわ。あなたがたと仰言って、一体どなたとどなたのことなのかね。そんな、あなたがたのことで私にまで恥ずかしい思いをさせないで頂きたいものですわ。あなたがたがかけてこそそそやっておいでのことにしたって、この私を騙しおおせると思っているらっしゃるの？どこを押せば『私達』だなんて言えるんでしょう？正直どこから見たってあんたなぞ、まだ「お部屋さん」と呼ばれる処までもいってないわ。せいぜい、私とどっちどっち。そんなひとが、よくもそんな『私達』だなんて口が利けたものですこと！」ここで宝玉までが、憤慨して二人の間に入って入り、遂に人格者といわれている襲人も、晴雯に対し、

「お姫(ヒイ)さま、あなた一体、私を相手に喧嘩をお売りになりますの？それとも、若様を相手どって口論を……云々。」と喧嘩ごしになる。——第31回

この場合、また、襲人の使った対人称呼の『お姫(ヒイ)さま』は、自分よりやや目下の同輩に向って、破格的な使用であり、襲人の怒りの程を現わしている訳で、これも、以下に説明するように、襲人がただ手当たり次第口にしたのではない。彼等の不文律では、若様に口論が出来るのは、姫さま方に限り、侍女風情の出来ることではない。そこで襲人は、お前が、私がとんで来る前から若様にたてをついてたのは、とんでもない思い上がりだぞ！という言外の叱責までを含めて、お姫様と呼びかけたことに気づかねばならない。洗練された中国女性の心の動きの利害さにして、はじめ

て出来ることであろう。では「我」に対し、二人称「你」(あなた、君、お前等を現わす。)はどうか。

c. 代名詞「你」に関する利害 (リーハイ)

上下観念の激しい当時において、その識別基準は、家族間では世代、使用者間では身分である。階級的に区別する場合は、原則的には、家族は通例使用者より高い。これらの原則は、不文律的に固く厳守されている。従って、我々日本人からみてほとんど何でもない「你」——あなた——の使用自体が、ある場合、非常に利害なことであつたり、繁雑な識別を要したり、強烈な感情や意志を表現したり、また、それを使用した為に非難攻撃を受けねばならなかつたりする。

原則的には、一函表参照—「你」は、話者が家族である場合は、同世代以下の家族および使用者の全部に対して使用出来る。話者が使用者である場合は、同身分以下の使用者に対して用いる。然し、身分の高い使用者が、若い世代の家族に対する場合は、絶対的に使用不能とはいえず、場合によっては、階級差を超越して、他の範疇で同位者と考えられる場合には使用出来る。²³⁾ 従って同じ相手であっても、時と場合によって、同席者の有無、または、お互いがその時に相手を何らかの範疇で同位者と認識しているか否かによって、平然と相手に対する利害の手段として使用出来るし、あるいはそうでなく使用したり、また、ひどくとがめられ、思いもよらぬ結果を惹起することにもなつたりする。次は、相手からとがめられた例である。

例3 平児はいい終るのも待たず、笑いながら、

「あなたも随分ひとをバカ扱いなさいますこと！先ほど私がもうちゃんと……云々。」

鳳姐も笑って、

「私はね、あんたが心中にも腹中にも私の事だけでね、他の人の事など心にないのではないかと心配でね、一言言い出さずにいられたのよ。早手回しにそうしてくれてたのなら、私より解っているわけだわ。なのに、あんたはまたカーツとなって、「私」だの「あなた」だのでしゃべりまくるなんてね。」

平児は、

「おあいにくさま。あなたと申しまして。お気に召しませんでしたら、ホラ、これ、頬っぺですわよ。も一度お聞き遊ばせ……云々。」——第55回

平児は、実は、夫を一にするという点では同一範疇に属する。だが、たとい将来お部屋様にまでなり上がっても、正妻とは敢然とした身分の違いがある。まして現在は純然たる使用者である。けれども彼女は熙鳳の夫賈璉に対しては、平気で「あなた」を使用している。が、また、その彼女が同一の賈璉に対しても隣室に熙鳳がいて聞かれている事を意識している時は、同じ賈璉を旦那様と呼び、熙鳳の事をあなたとかあの人とかいわず、若奥様といっている。封建宗法下の大世帯のなかで、誰からも好感をもたれてゆく為には、こういうことばのはしばしまで、鋭い神経をはたらかせて、善処することが必要であった。封建宗法社会はことばつかいの上でも人間をいためつけている。

この外、対人称呼としては、単語、固有名詞などが少なからずあり、「傻丫頭」(馬鹿娘)——はとに角、「猿や」・「チビ猿」・「猿め」など、人間以下の動物に擬した呼び方を、雲の上に生活しているような高貴の女性達まで、ふんだんに——怒鳴る時ばかりでなく、愛称的にまで——使っている。また、我が児を呼ぶのに「孽障」(因果の種)——というようなのっぴきならないものを現わすことばや、「冤家」——(自分を苦しいはめに陥れるので離れたいが、さりとて離れることも絶対に出来ぬ関係や状態にあることをいみする単語——など、人間の、ぞっとする様ないやしき、執拗き、肉感的なものを表彰する様々の語を、話の辭頭や呼びかけに、平然と使っているのは、その人間関係の利害を、それとなく如実に物語るものと思うが、紙数の関係でその例を省く。

2. 死・殺・狂また肉体の一部を表現する語に依る利害 (リーハイ)

凡よそ死は、人間が最も嫌うことである。逃れようとして逃れられない終着の運命である。相手も自分も、聞くさえ嫌なそのことばを持ち出すことによって、彼女達はギリギリ結着の感情を、日常茶飯事のうちに、さりげなくぶちまけて、相手に肉迫した。作中の女性の会話に、「生きてはいない。」「死ぬ」「殺す」が圧倒的に多く、ほとんど救済に暇がない。それに準

ずることばの、「気が狂った」また、肉体を痛めること、即ち、「頭の皮をひんむいてやる」「足をへし折ってやる」「手を折り (なさったわけでもなし、自分で運びなさい、——31回)」などが多く、ある個所では、それ等がギョツとする程、肉感的な生ま生ましさを持って迫る。これは、逆説すれば、彼女達が普遍的に、肉体というものを無意識中にさえも、強烈に意識し守ろうとしていることを感じさせられると同時に、ある例では、支配する側に立つ者の徹底的な征服欲・人間観、あるいは封建宗法社会の制度による利害といったものをも現わすものとして、詳しく探求する必要を感じずるが、やはり紙数の関係で数例をあげるにとどめる。

a. 王熙鳳は、紅樓夢の作者自身、第二回で冷子興にその利害な性格を語らせたのを初めとして、至る所で、あらゆる人物に、あらゆることばでその利害を説かせている。新しい中国でも、殷孟倫は「略談紅樓夢的人物語言——以王熙鳳語言作例」²⁴⁾の中で、「彼女の、衆に秀れた大胆さ、自信、気働きの凄さ、へつらいの巧みさ——は、紅樓夢人物中右に出るものがない」²⁵⁾と論じ、「熙鳳が、はじめて夫の秘事を知ってから、尤二姐の死に至るまでの神出奇抜の變化や、また、計略・行動に敏感に相手の出方をうつつしてゆくその機敏さは無類」²⁶⁾と称し、また「尤二姐を大觀園にあざむき入れるに当たってのことばは実に甘く柔かく、しかもその内容に至っては、極度にひどく悪らつである」²⁷⁾など、筆を尽してその利害を説いているが、結局、それは一面には、矢張り彼女の経済力を背景としてこそ出来たことであり、典型的な環境と、典型的な封建宗法的大家族の主婦的な利害な性格とが、適応しあって出現したものであるとする観方をとっている。以下熙鳳が、人の好い尤二姐を自身の勢力範囲である榮國邸内に引き入れ、死に至らしめる、その計画と過程の利害さを現わしつつ、同時に、ことばそのものも利害な例を探してみよう。

先ず、当の夫達には内密で、甘言を以て尤二姐を邸内に移らせた直後、家の召使達に、

例5 「万一、ご隠居様や奥方様の御耳にでも入れようものなら、まずお前達から殺してやるからね。」——第67回

と、いま貴顕の賈家の若夫人であり、江南四大門閥の一である王家の令嬢だった女性が、召使達に、この様なことばで釘をさしている。やがて、夫が、国と家の喪中の禁を二重に犯し、また、両親に内密で、しかも二重結婚、という四つの違法をしているとあって、無頼の徒に告訴させようとして、そそのかした時、梭巡する彼に焦ら立ってそしる。

例6 「尻押してもらっても、垣に登れぬかさっかき犬とはそいつのことだよ！」

——第67回

かくて、尤二姐をひくにひかれぬところに来させておいてから、彼女のそばでしかも、自身とはあい嫁である尤氏の部屋へのりこみ、迎えに出て来た尤氏の顔につばを吐きかけ、

例7 「あんたの尤家の娘、ほかに貰い手がなくて、賈家へ許り送りこむんだね。……

広い世間に男が死に断えたとでもいうの？ …中略… (口もきけない相手に) あ

んた、肺の中に痰でも詰ったの?! 豚の油が、五体の穴をふさいじまったの?!

…中略…いっしょにいて皆の面前で、はっきり去り状を書いて貰いましょう。

そうすれば私 (わたし) はさっさと出てゆくから。」——第67回

と、尤氏の手を引張るので、尤氏の息子の蓉がいたたまれず、傍から詫びるのへ、

例8 「雷に脳天を引裂かれ、五鬼に死骸をむしられるがオチだわ、この恥知ら

ずの、ど畜生め！……云々」——同上。

と泣きわめき、撲ろうとし、また、尤氏に食ってかかる。

例8 「あんた気でもふれたの? (このことばは彼女に限らず、至るところに出て

来る) まさかその口に茄子が詰っているわけじゃなし。それとも、この人達が

あんたに響をはめてたとお言いなの！…後略…。」——同上。

と、これは尤氏がうすうす知っていたことを、つづいてひどくなじる為のすべり出しのことばである。そしてめん〜と、また、烈々とつづいて、

例9 「…略…あんたなんか、腕もなければ、弁もたなず、口を鯉びきされたふくべ

も同然、ただもう小心翼翼々、賢夫人の評判をとることしか頭にないんだし…後

略…。」——同上。

と、唾を吐きかけ吐きかけ、後から後から立板に水と、罵りわめく。同じ封建時代の日本の上流家庭の中に、この様な場面が、想像出来ただろうか。

そして、この様に先ず怒鳴りたててから、(実は前以て自分がそそのかして訴え出させたことはおくびにも出さず) 無頼漢に夫が告訴されたことを言い出して、さも哀れげに、自分はその無頼漢に金を握らせ内緒に隠便に治めようとしたが、反ってゆすられる許り、自分にもそうそう金を出せず……と、愚ちをこぼすに当って、さて、何とやりきれぬ比喩を持ち出したことか。

例 10 「…略…際限なしにゆすられ。私(わたし)など『鼠のしっぽに出来た瘡——何程の膿(うみ)も出ぬ』ってわけでしょ。腹は立つ、気はせく……が、どうしようもなく……云々」——同上。

まことしやかにまくしたてるのにひきこまれて、尤氏母子は、告訴を隠便に治めて貰うよう、裁判所方面へ、少なからず袖の下を貰うことになるが、熙鳳との間はそれで免とならず、際限なく虐められる。

また、これに先立ち、この事件の最初に夫に手引した興児にむかって熙鳳は、

例 11 「大した若僧さね。お前と御前様とでやっていることの立派なことといったら！……えい、サア、ありていに白状するんだよッ。」——同上。

例 12 「……もし一言でも嘘がまじっていたら、……お前、まずその胴体のうえにいくつ頭が座っているか、撫でてみておき!」——同上。

興児は、最初当然シラを切る。と、怒って、

例 13 「エイ、その横っ面を！」——同上。

というので、慌てて傍の旺児が撲ちに近寄ろうとすると、

例 14 「なんて頼馬の馬鹿ったれだろう！ そ奴に自分で打(ぶ)たせるんだよ。お前がなんで手を出すことがある！ あとでお前、こんどは自分の頬っぺたを打つ番が来るよ。その時だって遅くはないわよ。」

そこで興児は、真実我が頬を、左右弓なりに開いた手で、十幾つ引いたいた上、白状する。熙鳳は、

例 15 「お前ってこのチビ猿は、ほんとならぶち殺してやるどころだよ。…略…その足をへし折ってやるのだけは見合わせよう。」——同上。

この様に千言万語のへらず口をたたき、策略をたておどかし、完全に白状させて後、このことを当の夫達に告げ口をさせぬ様、おどかして固く誓わせた後、更になお一言、念を押す。

例 16 「一言でも話してごらん。いいかい。その頭の皮をひんめくってやるから。」
——同上。

以上、第 65 回中の興児との会話の中のちょっとした例を拾っただけで、これだけ利害である。

特にまた、例 16 の「頭皮をめくる」という恐迫語は、仏様みたいといわれる奥方も、他の人も熙鳳も度々使い、同様熙鳳第 44 回の「小刀でお前のその肉をたち割ってやるから。」や、第 80 回香菱という侍女が、彼女の奥様に当る金桂に、「私のこの体から何から、みんな奥様のものです。」などというものが至る所に散見され、利害な感情と共に、封建宗法社会の大家庭の女性達の——使う側と使われる側双方——旧中国の人間観がほぼ見当づけられる。以下、更に数例、簡単にあげよう。

例 17 黛玉→宝玉

「神様！ あなたが戻っていらっしゃるまでに、いっそ、私、死んでしまった方がましよ。」——第 28 回

黛玉は宝玉と相思の仲である。ついには焦がれ死んだほど愛している。ところがある時、宝玉が、黛玉の同席する場所で、ほんのちょっと宝釵に流し目をくれた。それを怒って彼女は席を立ち、直後、宝玉が追いかけて来て、様々話しかけても全然とりあわぬ。仕様ことなしに用にかこつけて出てゆくのに後から浴せた。

本来、一刻も離れていたくない愛する人に、敢てこれ程の強い言葉を投げつける。強い心である。純粹な、一片の策略をも伴なわぬ、利害な、乙女の愛情の表現である。

例 18 墜児→小紅

「はい、はい。万一、私が人に口外したら、口端に疔が出来て、いずれろくな死に方は出来ません。」——第 27 回

例 19 惜春「願いを容れて頂けなければ、あとは死ぬるのみです。」

姫君中で一番おとなしい、素直な育ち方をしてきた少女が、自身の出家の希望を遂げるに当って、矢張りこのことばを持出している。——第 118 回

例 20 黛玉→宝玉

「雲ちゃんを許してあげる位なら、私、このさき生きてなどいるものですか。」

第21回

例21 史湘雲→襲人

「阿弥陀仏(かみさまの意)! 私がもしそんな真似でもしたなら、今、直ぐにでも死んでみせるわ…略…」——第32回

例22 刑氏(賈赦の奥方)→琮(赦の側室の子)

「何処を探せば、こんな猿がいるだろね! お前のお乳母は、殺されたって、ちょっとの免倒もみる気がないと見える。(お前の顔と云ったら)眉も口も真黒で……云々。」——第24回

子供を小ざっぱりさせてなかつただけで、乳母は、こんなにも罵られる。

例23 晴雯→年のゆかない侍女見習達

「なんて小娘(あま)っ子達だろ! どいつもこいつも夜昼かまわず、死人同然、ねて暮していて…略…」——第73回

例24 「ほかの者はみんな死に絶えちまったの?。」——第52回

一般庶民など一步も入れぬ代々の高貴のお邸である。晴雯また普代の家人(けにん)の家の娘。どこの令嬢と見紛う絹物づくめの腰元のうちでも最上級に位する磨き上げられた乙女が、なんでもなく発したことばである事を考える時、驚異的に利害である。

例25 晴雯→紅玉

「あんた、ぜんたい気でも狂ったの? 庭の花に…略…風炉の火も焚かずうろつき回って。」——第27回

例26 召使の妻女達→平兒

「……もし本当にお腹立ちを招いたとすれば、私共、死んでも身を葬る場所もないわけでございます。」——第55回

妻女達は、いわば家ぐるみ雇われていて、夫は奥向きでない仕事、彼女等は奥で働く。不馴れな姫君の探春が家事取締にあたりだしたとみるや、なまけ、ずるけ、皮肉り、物笑いにし、胡麻化そうとしたが、その実力と権威のあるのを知ったとたん、この様に卑屈になって、直接口をきくのさえ憚り、傍の平兒にまで詫びる。封建宗法的社会には必然産出する利害な奴婢根性でもあり、また一面、奴隸的雇用関係のなかに生きねばならない

彼等の、本音でもあった。利害なことばというより、利害な人間関係そのものであるかも知れぬ。

3. 会話そのものの利害 (リーハイ)

例 27 後室→趙氏及び一同

「舌ただれの馬鹿女！ なんだっていらぬ差出口をきくのだい。この子の死ぬのを願ったりして、なんぞ得をするのかね？ フン、夢を見てなさんな。これが死んだりしたら、わしはお前達の命を貰うぞ。これというのもみんな平生お前達がこの子の父親を唆のかし、無理やり、この子に手習い、学問を詰めこませたものだから、胆もつぶれてしまい、実の親父の顔さえみれば、まるで、鼠が猫をさけあるくも同然になっちまったじゃないか。これもみなお前達淫婦（いんだら）がけしかけたせいじゃないか！ 今こうしていびり殺せたら、さぞお前達はせいせいするだろうが、わしが、一人だとしてその分には捨ておかぬぞよ。」——第 25 回

当主、政の側室趙氏に呪われ、危篤に陥った宝玉をかばって、後室は、趙氏に唾を吐きかけてその口をふさぎ、勢あまって、見舞いに詰めかけていた奥方達まで罵り散らす。やがて、棺の出来た知らせを小耳に挟むと、

例 28 「どやつの仕業だ。棺など作らせおって。」——同上

例 29 「棺を作らせたそやつを引出してぶち殺せ。」——同上

当時の女性として、ほとんど位人身を極め、事あれば、皇居へ参内出来る、富貴と栄誉を一身に集めた福德の御隠居老婦人の言として、乱暴すぎる様だが、この示威が平気でおる往時の社会通念であった。

例 30 元来が人間界で風流を経験したいというので、大岩が生まれ変わって来た宝玉は、尤三姐から、「あの方は、娘たちの前でなら、ちんちんでもいただきますって方ですわ。」——第 28 回——と評された人間。

ある日、宝釵が腕輪を脱ろうとする。その二の腕の白さに、ふと我を忘れて見惚れる。気配に気づいた宝釵が紅くなって、退室しようとする、早や戸口には、黛玉が笑ってたって二人をみている。瞬間、驚く宝釵の問いに答えて黛玉は、

「空で一声、鳴き声がきこえたので、見に出て来たら、なんと、まぬけな雁が一羽。」——第 28 回

一瞬、既に心を取りなおした宝釵は、

「そのふぬけな雁は、何処に?……私も見たいわ。」

もともと恋仇? に近い対蹠的な二人である。日本なら、さしずめ宝釵は、思わずいっそう顔を紅らめるか、俯向いてしまったろう。ところが宝釵もさるもので、瞬間に、私もみたい——と、宛ら心を合わせて一貴公子を、なぶりものにするかたちに立ち回ってしまった。円満でにこやかなお嬢様、と評判の宝釵の内心の働きの鋭さ、ずるさ。さて、

それに答えて黛玉、

「私が立って、来たとたん、スーッと一声、飛んで逃げてしまったわ。」

言いつつ黛玉は、はっしと手にした手巾を、宝玉の顔へ、投げつける。不意をうたれ、手巾が眼に当って、痛いッと怒鳴る宝玉に黛玉は笑いながら、

「御免、御免。手が滑っちゃったのよ。宝釵姉さまが、ふぬけ雁を見たいって仰言るので、私が指さしてお教えしようとしたら、つい手が滑って。」——第29回

相思である筈の男が、瞬間、思わず他の女性に見惚れた時、何と清烈な怒りであろう。間髪を入れず、何と手痛い叱責であろう。しかも、20才にもみたぬ乙女の、何と巧妙にすぎる利害な仕打ちであろうか。然しながら、黛玉の利害には、その心底に、必ず何時も、真正直な一途なものが感じられる。

次例の柳家的に代表されるおかみさん連の利害をみよう。彼女の口の悪さは枚挙に暇がなく、作品の中段に至っては、胸のすく様な痛快な悪罵の連続である。

例31 柳家的→門番の若党

「なんだい、チビ猿のくせに! 叔母さんが(自身を指す)情夫(おとこ)を探しに出かけたら、おまえにもう一人叔父さんがふえるのは当りまえじゃないか。…中略…お前、その頭の上の便器——中国人が室内で使う丸型の便器の、蓋にみ立てた。当時の子供は頭の周囲を剃り落し、真中に円く短い髪を残したのを指す——の蓋そっくりな髪を私にひんむしらせるんじゃないよ。サ、さっさと門をあけて入(い)れないのかよ。」——第61回

帰門したところを、門番の若党から、奥から呼びに来たが、一体どこへ

行っていたときかたてのことばである。正面から、「怪しまれる様なことはしてないよ。どこへ行こうと、お前等若僧の知ったことか」——というような言い方をせず、この様に高飛車な下品な言い方をする。厨房の女達の取締りで、ボスの存在とはいえ、名だたる大家の女中取締りが、日本なら大門内のやり手婆くらいかし使わぬ口をきく。そうして、門を開けてやる役得として、門外の園の杏を盗んで来てくれと門番から言われると、

例 32 「此奴め。気でも狂れたのかい?! …中略…誰れも彼れも、まるで顔でもひっかかれた時みたいに、気の立ってない者は一人もないのさ。他人 (ひと) が木の下を通っただけで、両の眼を、もう、あの烏骨鶏 (おこつけい) みたいにキョロキョロさせて見張ってさ……略。」——同上

「気が狂れる云々」の形容は、中国在住中度々耳にした。「とんでもないこと」と、日本ならいう時、誰でも気楽にこの様な利害な言い方をする。

4. 比喩のおもしろさと利害 (リーハイ)

彼女等の利害は、更に、あっと思ふような適切具体的ないいまわし、肉感的な譬えを、刹那々々の会話に苦もなく組みこんでゆくところにも窺い知ることが出来る。

例 33 劉老々→熙鳳

「瘦せ死んだ駱駝とて、馬よりは大きい。(腐っても鯛)」と申すたとえ。内実がどうであられましよう、お前様がうぶ毛一本抜いて下さりゃ、そいつは俺(わし)らの腰より、よっぽど太うござりますよ。」——第7回

冒頭の諺は、現在も日常使われている。傍線の個所は、何と肉感的な譬であろう。劉老々は王狗兒の岳母。狗兒の祖父が奥方王氏の父と知りあい、王家の羽振りのよいのを利用しようと、同姓なのを幸い親戚と名のる事を許して貰った。その昔の縁故を辿り、親戚だといいたて、逼迫した家計を助けてくれと頼みに来て、目的を達した時の、お礼のことばである。施こしをした側としては、月並みにありがとうといわれるより、余程お大盡気分になれる。人情の機微を心得た言い草であり、眼に一丁字のない田舎の、梅干婆さんまでが、実に巧みにこの種の言いまわしをして、人間の弱点に巧みに乗ずる鋭い知恵をもっていた。

例 34 日本でもよく実家の自慢をする女性がいる。が、熙鳳は病中におよっと口が滑って実家に言い及び、夫に、

「……御自分の家を石崇（晋代の大金持）や鄧通（漢代の大金持）なんぞの様に思っていらっしゃるでしょうけど、実家の王家の地のすきまを掘ってみただけでも、あんた方が一生暮せる位のものは出ますよ……」——第 72 回

大して喧嘩をしている場合でもない、なんでもない時に、これほど大きな比喩で以て、これほど夫の家を見下し、実家を賞める。自身の夫である対手を余りにもピシヤリと叩き伏せるいい方である。また、石崇は第 65 回、尤三姐が意中の人、柳湘蓮を説明する時口にして居り、当時しばしば用われたと考えられる。晋・漢兩代を通じて歴史に残る大財閥を出す辺り、三井・三菱につきる我が国の比喩と比べて格差も大きく、規模の大きさ、相手にひびく強さは、幾層倍である。

例 35 「あんたという人は、糸のたぐりようも鮮かなものねえ…略…。」

賈芸が職を求めに来る。彼が、頼んでも駄目と見極めをつけた所はさっさと放ってしまい、その筋をつたって、熙鳳へ賄路を張り込んで、職を授かった時の熙鳳のことばである。が、実は熙鳳自身、賄路をもって来る様に前もって仕向けているのである。その上で、平然として、この様にあきれ返ってられる凶太さ——である。

例 36 熙鳳→李執

「林之孝夫婦なら、揃いも揃って鏝で突かれたって黙っているわ。ほんとにあれたちこそ似た者夫婦。片方がかな蠶なら、かたっぽうはまるで蠶。どうしてこんな気のきいた娘が生まれたものか知ら？」——第 27 回

例 37 智能→宝玉と秦鐘

「フ、フ、一杯のお茶まで取りっとなさって。まさか、私の手のなかに蜜でもあるじゃなし。」——第 15 回

智能は美しく若い尼僧の卵。かねて情交ある秦鐘に求められて捧げた茶を、その親友の宝玉が横取りしようとする。自分の汲んだ茶を名家の美貌の男性二人が取合うのを見て、あどけない年頃の小娘にして既に備えている女性の自信とねばっこさが、俄然以上のことばをひねり出している。

日本でも従来、女性の職場でのいがみあいは烈しかったが、封建中国においては、前述した如く、階級差が不文律であるだけに一層はなはだしく、それにつれて、女同志の将来を堵(かけ)た感情のせり合いが、ことばの端々までに現われる。

例 38 秋紋→小紅

「おどろいた恥知らずの下司(げす)め! 水を汲んで来てって頼んだのに、用事にかこつけて、私達を取りに出しておいてさ。自分はこういうきっかけをつくろうと手ぐすねひいて待ってたんだよ。フン、一里一里とこんな風にのしあがろうっていうのね。……まさか私達があんたなんかには及ばないっていうんじゃないだろうね。鏡とも相談してみな。お茶や水を差上げられる様な柄かどうかって。」——第 24 回

小紅は宝玉付に回され、張り切って玉の輿に乗る機会をねらっている。だが、小丫頭では侍女の下働きである。折しも宝玉が自身茶を汲もうとしているのを見つけ、室内に入って来て捧げた処へ、侍女の秋紋達が帰室した。秋紋もまだ夜伽はさせられず、夜伽をする襲人も、まだお部屋様ではない。彼女らの感覚では、余りにも遙かな出世街道である。蓮葉で勝気な小紅が、まず宝玉の眼にとまって引き上げられる機会をねらっていたことを、見抜いた秋紋の鋭鋒である。その深刻さはただの、職場でのいがみあいの比ではない。

例 39 台所の女ボス柳家的は、権威のない者あるいは自分の利益にならない者へは、卵一つも出し惜しみ、サービスも至極く悪い。要するに封建時代的に徹底した下僕根性である。勢力のない令嬢の一人である迎春づきの侍女見習の蓮花児が、姉役の侍女司棋の注文の半熟卵をこしらえて貰うよう頼みに来たが、当然よい返事をしない。そこで次のやりとりである。

蓮花児←柳家的

「……なにもご自分の生みなさった卵というでもないのに…略…」——第 61 回

柳 家 的

「口はばったい言い草もたがいにしなよ。これは、あんたの母さんの産みたての卵なんだよ。」…略…「あんたらは奥まったただっぴろいお屋敷うちに暮していで、お湯が来れば手を出し、ご飯が来れば口を開ける。鶏卵なんてざらにある

と…略…」——同上

機関銃の様に動く彼女等の紅唇であり、蓮花児も黄色い声をはりたてる。

「…略… そんな、車に二杯分もお説教を聞かされる覚えはありませんよ。あなたに頼むのは、あなたにお得がいくからでなくてなんでしょ。」……(そして、先日宝玉付きの侍女の注文に、易々諾々と従った事を指摘して) ……大あわてで手まで洗って炒めあげ、まるで犬が尻尾を振るみたいに、自分で運んでらしたじゃありませんか。」——同上

第一に、何と痛烈な比喩の一騎打であろう。十歳余りの少女が、「御自分の生みなさったものでもないのに。」と、四十女? の卵の出し惜しみを責める辺り、我々にとっては奇想天外な攻撃振りである。第二に、絶対的な祖先崇拜の宗法社会であった中国では、祖先を悪罵し、侮辱することが、最も相手を侮辱することであった。——という事をも併せて考える時、「あなたのお母さんの生み立ての卵。」——とは、実にこの上なく高飛車な利害さである。第三に、こんな小娘までが、従来中国では、一つ仕事をすれば、それだけ、役得余得がせしめられることを心得ていて、はっきりそれを押えてかかっている。こういう中では、一途におっとりしていたら、生きてゆけなかったかも知れない。

例40 彼女の伯母→春燕

「おまえのその肉を引裂いて食ってもやりたい程だといってな。これでもまだわしに何って柏子木みたいにギャアツク口答えするのかい。」——第59回

そういつて、杖でぶたれて春燕

「……これでも私、『顔洗いのお湯を焚き焦(こ)がした』覚えはなし、どこに落度があるのです。」——同上

例41 一同→老女

「……一旦あちらのお腹立ちを招いたが最後、『食べきれぬ分は包んで戻る』——

うんと引っぱたかれるような目に会いますよ。」——同上

共に、前後の説明さえ不必要なほど、そのまま利害で、心に食いこむ比喩である。

例42 襲人→だれにともなく

「あの人、さしづめ、美味しい饅頭だわ。奪い合いで、滅多に手になど這入らな

い。」——第 60 回

平児が、来たと思えば、すぐ迎えが来て出て行ってしまった時。

5. 俗諺・歇後語による利害 (リーハイ)

中国人はいったいに、歇後語 (成句の前半だけを言い、後半の意味を寓する一種の隠語。例えば、めくらがのぞき眼鏡を見る——とだけ言えば、下句の、むだ金使い——の意になる) 等の民間俗諺や、格言を話の中に使うことによって、その言おうとするところを強め、味を含ませることが巧みである。彼等のそういう話術は、人間味を豊かにみせ、人間関係を深奥にしている。紅樓夢の作者は、作中の人物の会話の運び方でも、中国人のそういう特徴を巧まずして巧みに描写している。²⁸⁾ 俗語・格言めいたものが至る所²⁹⁾で目につき、それが、話者の利害な性格、あるいは、相手に利害に当ろうという——当の話者が意識すると否とにかかわらず——意志を、いっそう躍動させている場合が少なくない。ちょっと拾っても、次の各例がある。

例 43 尤三姐→賈璉

「なにも私達に向って、そうお上手を仰言いますな。私達は『水の中の雑麵(うどん)。——たべられるものなら食べて見ろ』ですわ。……めくされ金の少々許りで、私達姉妹を芸者代りに遊んでる積りでしょうが、そりゃ全然算盤のはじき違いですわ。それは、あなたの奥さんが、一筋縄でいく人でないってこと位、わかってますわよ。でも、こうして姉をむりやり妾にする様なまねをなさっておきながら、『盗んだ銅鑼では、たたかれぬ』ではあんまりですよ。その鳳 (このフォンの発音はまた気狂いを現わすフォンに通ずる) 奥さんとやらにお会いして、いったいいくつ頭をお持ちなのか、何本手をお持ちなのか、この眼で見届けたいわ。……少しでも人を人と思わぬところが見えたら手始めにあなた達のその牛黄・狗宝 (けものはらわた) を掴み出し血祭に上げた上、あのじゃじゃ馬を相手に命がけの勝負をしてみせますよ。その位の腕がなくてなんの尤三姐さまですか…後略…。」——第 65 回

賈家の若殿の一人璉は、この話者尤三姐の姉、尤二姐のところへ通って来る様になった。だが、邸へ入れて側室として面倒をみる積りもなかった。風にも耐えぬ林黛玉に、爪二つの嬌艶尤三姐は、璉と珍の兄弟二人を

前に並べ、一面、その嬌姿容色で声も出ないまでに惱殺しつつ、炕(オンドル)の上に仁王立ちして、立板に水と罵倒する。賈家の威光を笠に諸所で仕たい放題をして来たいい年配の璉も、この段(くだり)を中心とした尤三姐の言い草に、これは凄い女に手を出したものだ、と、ふるえ上がる。

尤三姐は、名だたる不見転ではあった。また父が亡く、金持ちではなかった。然し伯母尤氏は、現在自分の情事の相手、珍の正夫人であり、彼女達は決していわゆる下層無産階級とはいえなかった。しかもこの時、まるでそういう人達の持つ敵愾心と烈しい闘志を発揮していた。また一方、この姚冶の美女は、この時、珍の息子、蓉とも無関係ではなかった。彼女の利害は、単なることばの上に止まらない。風に吹き消される蠟燭さながらの、旧中国女性の身体に、どうしてこれ程の利害が宿り得たか。抑圧された環境が、彼女ら本来の精力を、利害というゆがんだ形に発現させたとするれば、またその精力の源泉は何処にあるのか。現在の新しい中国では、³¹⁾この尤三姐のことばのなかに戦闘的女性を見出しているようである。

ちなみに、二重括弧の中は何れも、現在に至るまで一般につかわれている俗語歇後語である。

例 44 平兒→賈璉

「義理知らず! 『河を渡った足で橋をこわし』ていらっしやる! もうこの先、金輪際、奥様の前をとりつくろってさしあげるものですか。」——第 21 回

平兒は熙鳳気に入りの侍女、忠実無比。そこを見込んで、以前二人の妾を追い出してしまった熙鳳は、進まぬ平兒を強いて夫、璉の妾とする。平兒は嫉妬深い熙鳳の為に、年に一、二度の交りで、あとは侍女としてこき使われる許りの境遇によく甘んじて、夫婦の双方に真に忠実に仕える。ある時、璉が外房(そと)で放蕩し、その女の記念の髪が、すんでのところ、熙鳳にみつかるところをうまくかばった。直後、璉はその証拠物件を、熙鳳が出かけるや否や、平兒のすきをみて奪いとる。虐げられていることさえ自覚せず、ただ周囲の讃め者としてまめまめしく生きていた当時の女性が、余りな男性のずるさに瞬間、思わず発したなじることばの中にさえ、俗諺が取り入れられている。

6. 「かこつけ」に現われる利害 (リーハイ)

利害の変形的なあらわれである様に思える中国人のことは使いのひとつに、「かこつけ」がある。特に拒絶の場合、多く使われるが、これは畢竟、自分を悪く思われない様にとの利己から発したものであろう。そういうところに心の働きの利害さを感じるものでもあるが、同時にそれは、極度に複雑危険な人間関係の社会に在っては、その危険と、不必要な葛藤の発生を避けて、表面だけでも円満に事を運ぶ潤滑油の役目を果たしてもいる様だ。次の会話は、その好例である。まだかむろ的存在の小Y頭ながら、「取りに行きたくない。」——などという直接表現を避けている。相手の乙女も、敏感にそれを見透かしていながら、寛容であり、しかも一応は罵って(今後をいまして)おいてから、自身とりにゆく。この辺の行き届き方は、変形された好い意味での利害である。

例 45 佳恵→紅玉

「花の姉さんが、私に櫃(ひつ)を運んでくれて、まだ私を待っていないさるのですもの、御自分で取りに行っていらっしゃいな。」

「あちらがお待ちかねっていうのに、あんたは座りこんでふざけてたのね。私が取って来てと頼まなかったら、あちらもあんたを待っていない。——ってね。

わるいったらありゃしない。……このはねっ返り!」——第 26 回

7. あてこすり・皮肉に依る利害 (リーハイ)

封建宗法制度下の大家族の中で生活し、人間関係が錯綜する時、齒に衣着せず、真直ぐ当人に言ったのでは、具合の悪い——自身が不利になること——も多い。そういう社会で、あてこすりという話術が発達し、皮肉が鋭くなるのは当然であろう。

黛玉は、紅樓夢が悲涙小説たる由縁である悲劇の女主人公である。長いものには徹底的に巻かれることが、身を守る第一条件であった當時に在って、わずかに權威に反抗する気配を感じさせた、唯一の世俗臭のない、姫君である。華麗の文才は、行間人の肺腑を衝き、その言葉の烈しさは、また時に、自身に好意を寄せる人々にさえ向けられて、寂寥の身邊に、最後まで、わずかに付添った人でさえ、生前には遂に心から打解けあうことが

出来ず、孤零な生涯を、鋭い悲しみと共に終えてゆく。次例における利害な言葉は、当面の相手に許りでなく、一石三鳥の鋭い箭である。誰々にあてこすったか理解し易いよう、暫く原作のまま写述する。

例 46 「誰の知恵なの、お前に届けよなんていったのは。気を使ってくれたのは有難いけど、いくら何でもそう易す易すとこの私が凍え死したりするわけもなからうじゃないの？」

「それが……紫鵲姐さんが、姫様がひょっと寒がっていらっしやるとなんだから、お届けする様に仰言っています……。」

と雪雁が言うのに、黛玉はそれを受取って懐中に入れ、笑いながら、

「お前よくもまあ、あれの言う事をきいたものね、(先に、宝玉が宝釵のいうことをきいたのを非難している) 私がふだんお前にいいつけることは、まるでどこ吹く風——なのに、あれが言ったとなると、天子様の仰せだっってこう早くは聞けまいにねえ。」

このことばを聞いた宝玉は、さては黛玉、これにかこつけて僕を皮肉っているなと覚りましたが、さりとてやり返すことばも浮ばないまま、ただニヤニヤしてきき流すだけでした。宝釵にしても、黛玉がこういうくせの持主ということとはかねて承知なので、とりあいません。——第8回

本能寺なる主たる敵は宝玉、次が宝釵、雪雁はただ雑兵として、平生のことを皮肉られたに過ぎぬ。三人三様の討ち死である。なお、この黛玉の場合は、利害さが表面に現われた鋭鋒である為、それはやがて、彼女一身の上に全部はね返って来て、いったん、恋することが暴かれた時、完全な、人心の失墜という形で、彼女を失意のどん底に陥入れた。この点最も有利に立ち回ったのは、万事につけて対蹠的な宝釵である。次項を觀よう。

8. 隠れた利害 (リーハイ)

利害は、激しい言葉、えげつない表現、強いあてこすりなどとして現われるばかり、とはかぎらない。ある場合には、話者の性格が深遠な利害さであればあるだけ、それがことばという処世の道具として、有効に駆使された時、外面的には、反って非常に温雅なさりげない言い回しとなって、人々に何の警戒心も起こさせない。

本例の話者薛宝玉は宝玉の、玉に配するに金の飾を持ち、黛玉の風にも

耐えぬ幼姚の美に対して、雪が凝ったといわれる豊麗無類。邸内百に余る上下の人気を一身に、情操兼備、宝玉の正妻は彼女以外になしと誰からも思われるあらゆる行動をしていた。そうして実は、彼女こそ誰よりも、黛玉の宝玉に対する命をかけた愛情を熟知しながら、その黛玉が、恋心を抱くというだけでふしたらとされ、人心を失い悲恋の為に持病も急激に悪化、孤愁の極みに息を引取る、宛もその時刻。一方黛玉を慕う余り、宝玉が脳を患い、認識力がなくなってしまったその期間を利用して、黛玉と思いを違わせて結婚させてしまうよう計画された長上達の策に、従順に従っているかたちで、宝釵は万人羨望の宝玉との結婚式をあげ終わり、望まれぬ夫に仕える健気な花嫁——との、万人の三情を得つつ、泰然として、稀代の家柄、榮国邸の嫡男の正妻の地位に治まってしまふ。

かつて、中国では、この宝釵がめでたいとして、理想の女性だった様に見えた。成る程、言葉使い、それに関連する表面的行動等は、いわゆる常識的で行届き、実に老練ではあるが、半面、以下の二例の如くその柔和な外皮の底に、規模の大きな利害の存在が認められ、外国人である私は一種の嫌悪に近いものを感じないでいられなかった。このひずみは一体どこから来ていたのか。あるいはこれは、単純な社会組織で歴史が短く、複雑な人間関係で揉まれることの少なかった我々に比し、彼女達が、全く封建宗法制度下に在った上、常に支配権力が変わる為、弱肉強食の状態が烈しく、すべての女性が宝釵程度の利害を具備していなければ、巧みに生きる事が出来なかった。そこでその利害が、(1) 周囲からは気付かれぬ様な巧妙な発露で、目標者だけに限られ、——その目標者を着々と窮地に追込んで行く場合。あるいはガラリと姿を変え、(2) 権威に対する見事に紛飾された素直さや、徹底的な阿諛追従として発現する為、当の相手からさえ好意を保たれつつ、内実は「話者の欲望を巧みに遂げてゆく様な場合、それによって煩わされない周囲は、その利害を反って美徳の様に感じ、羨望したのかも知れない。要するに、やはり時代と環境の反映から来ていたのであろう。実例に移ろう。

例によつての大家族団欒の場である。この件の直前、宝釵は、黛玉と宝

玉の仲の好さを鋭く意識せずにいられないはめになっていた。だから、ここぞとばかり執拗辛辣に兩人に搦んでゆく。暫く関係の全文を掲載、潜在する利害を覗うたすけとしよう。賑やかな分囲気の中で。

例 47 宝 玉

「それはそうと、お姉様はどうしてお芝居見物にお出かけにならなかったの？」

「暑がりなのですよ。私。二幕も見たら、もう熱くて熱くて。でも、席を立とうにも、お客はお帰りでなし、仕方なしに加減が悪いことにして、抜け出したのよ。」

宝玉は気まりが悪く、照れかくしに、

「道理で皆がお姉様のことを、楊貴妃様だなんていうのですね。——肥っていらっしゃるからだな。」

「私が楊貴妃に似てるのは、楊国忠のような頼みになるような、出来のよい兄や弟がいないからですよ」(宝玉が学問嫌いで、出来損いといわれていたことを指す)

折も折、靨児(彼女の侍女)が扇子を失くしたことで、(宝釵に、そんなだしにつかわれるとは夢にも思わず)笑顔で探しに来てたずねる。

「きっと、お嬢様が私のお蔵し遊ばしたのでしょ。お姫様、お慈悲ですの。どうぞお下げ渡し遊ばして。」

と、宝釵は、眼ざしも鋭く、きつと指さして、「気をつけてものを仰言い！私が一体、誰にからかかったりした事があるというの？ いつもお前にふざけていらっしゃる姫さん方のところへ伺ってきくのが当り前じゃないの！」

と叱りとばす。宝玉は更に気まりが悪く、照れ隠しの話を他の者を相手に初める。

黛玉は、宝玉が宝釵を冷かすので、先刻から内心、溜飲の下がる思い。この機会に、自分も一枚加わろうと、口を挿もうとしかかった処へ、意外、靨児が来、それにかこつけて宝釵が宝玉を叩き伏せた。そこでサット気を変えて素直に、「宝姉さま。その暮って、どんなお芝居でしたの？」

だが宝釵は、とっくに、黛玉が溜飲を下げているのを、見てとって了っていた。だから、笑顔で、

「私の見たのは、李逵が宋江に悪態をついておいて、後でまたお詫びするくだりよ。」

(先刻二人一黛玉・宝玉一でちょっとした喧嘩をし、直ぐまた熱烈に仲直りをしている現場を熙鳳に見られ、まるで子供の様だ、とたった今熙鳳から素っ破ぬかれたことを指すのだ、と年下の黛玉にもなはピンと来ているのに) 宝玉はとたんに笑い出し、

「姉様ってば、古今東西何でも物識りでいらっしゃるくせして、どうしてこの外題ぐらい御存知ないのかな？ あれは、「負荆詫罪」(いばらを負ってつみのわび)ですよ。」

宝釵は笑って、「まあ、あれが、「荆を負って罪の詫び！」なの?! あなたの方の様に古今のことに通曉しておいでだからこそ、「荆を負って罪の詫び」がお解りなのですわ。私なんか、どういうことが「負荆詫罪」(荆をおってつみのわび)だか知らなかったのですもの。」……

ききもおえず宝玉・黛玉二人は、サッと赤面する。熙鳳は文盲なので、話そのものの内容は、あまり理解出来ないものの、三人の素振りからして、早くも察しをつけ、矢張り笑いながら、

「この暑いのに、誰れなの？ 生薑なんかたべた人は？」

一同、何の事やらサッパリわかりかね、

「生薑など食べてる人なんて、ありませんわ。」

鳳姐は、とぼけて手で鬚の辺りをなで、

「じゃ、どうしてこんなに、ヒヒリリするのか知ら？」

宝玉、黛玉の二人は、このことばを聞いてなおのこと、居堪らぬ思い。宝釵は更に追討をかけようかと思ったが、宝玉がしんから恥じている様で、素振りまで改まったので、更にいい募るのも憚られ、笑いに紛らせその場を納めた。他の連中には、この四人の話はまるで通ぜず、熙鳳の冗談だけで大笑い、三人の心中の葛藤は万座の誰知らずに終ってしまう。二人だけになると、黛玉は、「あなたもあなた。私より利害な人におちよっかいなどおかけになるのですものね。……云々。」——第30回

以上が、潜在利害(1)の例としての宝釵の会話である。(2)例に移ろう。

金釧児は奥方から、不品行をにくまれ戯首された為、井戸に身を投げる。その知らせの者と園内で偶然遇い、委細を十分聞き知ったとたんに、宝釵は直ちに、奥方の許へ馳けつける。何くわぬ顔で、奥方が、自身の仕打を後悔しつつ委細を語るのをきいた彼女は、澄まして慰める。

例 47 「お婆様はお慈悲深い方だから、そんな風にお考えになりますのよ。でも、私にいわせますとね。あの人は、腹立ち紛れに井戸へはまったのじゃなくて、多分宿下がりして、井戸の側でふざけているうちに、足を踏み滑らせて落っこちたのですよ。あの人ったら、いつも上の人から取り締られつけているでしょ。今度の様にいったん暇を出されると、どうしたってあちこち羽を伸して遊び歩くという事になりますものね。そんな身投げなんて、ひどく腹を立てる訳がありませんわ。若しまた、かりにそんな風にカッとなったとするなら、余程馬鹿で、惜しむにも当りませんわ。」

誰一人寄りつかず奥方の周囲は、この時無人であった。後悔で身の置き所のない時、なんと耳当りのよいことばであろう。巧みな阿嫂、機会の掴み方みである。後室に次ぐ実権者奥方の心を掴むのに、これ以上効果的な何があるろう。しかも、非難の対象は、仕返しへの恐れのない死者である。奥方はやや心が軽くなるが、まだ不安を示す。と、宝釵は、

「どうしても気がお済みにならなければ、せいぜい銀子の何両か多い目に下げ渡しておやりになって、葬式を出させておやりになれば、主従の情を尽した事にもなりましょう。」

奥方は、金は既に五十兩遣ってあるが、死装束として、仕立下しの新着を二襲(かさね)もやりたいが、今手許には、黛玉の誕生祝にやるために作ったのしかなく、それをやれば縁起でもない、黛玉が気にやむだろうから。」

と嘆く。

「……伯母様この急場にお針女(はりこ)を急がせて作らせることありませんわ。私、先達て二襲(かさね)としらえたのがありますから、あの人にやれば面倒も省けるじゃありませんか。それにあの人は、生前私のお首を着たこともございましてね、身丈もぴったりですもの。」

「でも、あなただつて縁起をかつがぬわけじゃなし。……」

「お婆様。ちつとも御心配なく。わたくし、昔からそんな事気にしないことにしていますのよ。」——第 32 回

かくて奥方の信頼と好意を勝ち得たことが、どれほど宝玉との結婚に有利に作用したか知れない。

他人の心の動きに乗じて、歯の浮く様なへつらいをやってのける度胸。機を見る早さ。その機を逃さず踏みこむ行動力。非を理に言いくるめる頭

の働き。20歳前にして既に奴婢に対する雇用主の狡知と常識を具備し、しかもその総べてを雪が凝ったという女菩薩の外面に和やかに美しく包みおおせている女性。私はこれを利害の極致としたい。

例 48 金釧児→宝玉

「私のこの唇には、先刻さした許りの香料入りの紅がいったいついてましてよ。いま、お食べになれましたか？」

二人だけの場というのではない。宝玉が、殿様に叱られる為、呼び出されてゆく奥方の居間の前廊下である。ずらり、着飾った侍女達の居並んだところで、つと、ひきとめて囁いた。瞬間、上役から押し退けられ、たしなめられはするが、何百年前の封建の御殿のなかで、何という十代の無軌道振りであろう。烈しきであろう。因みに、彼女は(前例47参照)後に奥方の不興を招き、退けられ、井戸に沈んで自らを殺す。そのレジスタンスを、弱者というべきか、強しとするか。

例 49 「足りなくなったりしてなければ、それでいいけど、ただね、他にふえてたりしなかったかい？」——第21回

夫が、娘の病氣平癒祈願のもの忌みの為、外泊して(前例44)帰った。直後、その身回り品を、平児に片付けさせた後、熙鳳がたずねた。表面は誠に何気ないことばではあるが、夫が万一女を引入れて契りを交わしてなどいたら、必ずや、女のかたみの品、あるいは忘れ物があるに違いないと睨んだ眼力。その周到さは、恐ろしいまでの利害な女心である。人の好い平児は、調べてみて失くなっている物がなければ、こんな結構なことはございませぬわ。誰が増してなぞ——と笑っていたが、指輪も髪の毛一本も爪もですよと、指摘されて調べてゆくうち、果然、女の髪束が出て来た。利害といわずして何であろう。

1) Pearl S. Bach, Letter from Peking, 1957. 高橋正雄訳 北京よりの便り, 三笠書房, 106—107 ページ。

2) 中国語辞典 大学書林。

3) 井上中国語辞典 江南書院。

4) 辞源 商務印書館。

5) 姓名のない者を除いて、通行本卷首明齋主人総評では、男子 232 人、女子 189

- 人、計421人。
- 6) 中国古典文学全集 平凡社、第24巻 399—400 ページ参照。
 - 7) 李希凡・藍翕著、紅樓夢評論集 作家出版社。
 - 8) 王永、論紅樓夢的語言芸求、紅樓夢研究論文集 人民文学出版社、北京84 ページ。
 - 9) 同前 86 ページ20—21行。
 - 10) 但凡家庭之事、不是東風压倒西風、便是西風压倒東風とある。
 - 11) 紅樓夢考証。
 - 12) 人民文学出版社、1958年、戚本(国初鈔本原本紅樓夢、戚蓼生の序文がある為、如上の略称とす)を底本に、庚辰本(乾隆甲辰〔1784年〕本の石頭記の略称)を主要校本とし、その他の脂硯齋本系統の諸本を参照したものである。
 - 14) 上海福州路338号、広益書局刊行 昭和18年中国人より贈られ、刊行日付なし。
 - 15) 前掲、中国古典文学全集 402 ページ。
 - 16) 同前。
 - 17) 同前。
 - 18) 同前。
 - 19) 山口朋子、対人称呼の使用における「正格」と「破格」について、中国文学報第一冊、京大文学部中国語学中国文学研究室、1959年10月。の、2、程乙本における整理とその方向。
 - 20) 殷孟倫・略談紅樓夢的人物語言—以王熙鳳語言作例、前掲紅樓夢研究論文集 101 ページ参照。
 - 21) 前掲、中国文学報 104 ページの図参照。
 - 22) 第31回 襲人对晴雯 及び、第55回 平兒対熙鳳の会話。また、本稿の対人称呼による利害例2・例3に詳述。
 - 23) 前掲、中国文学報105 ページ。正格の決定とその体系。
 - 24) 前掲、紅夢樓論文集 100 ページ。
 - 25) 同102 ページ。
 - 26) 同114 ページ。
 - 27) 同115 ページ。
 - 28) 前掲、紅樓夢研究論文集 86 ページ。第4—第6行。
 - 29) 例えば、(1) 例33 劉老々対熙鳳 (2) 例4(春燕対その伯母の会話の中にあるもの、また、(3) 作品中第55回平兒のことば中に「垣のころぶをみなで押す」や(4) 73回探春のことば「物はその類いたむ。「唇竭きて齒亡ぶ。」また、55回熙鳳「笑顔つくってドスを呑む」「賊を生捕るには大将から」等。
 - 30) 前掲、紅樓夢研究論文集 98 ページ。第1—第3行目。

○ 結 語

以上、紙数の関係で膨大な紅樓夢中、ほんの一部の「利害」例を挙げたに過ぎない。いま、これら中国女性の利害が、一体どこから来たものであろうかに、簡単に触れてみたい。

今回、特に如上の目的を以て、繰り返し読んでみると、作中の女性達は、貧富貴賤老幼の別なく、「死」ということば、また、「生きてはいない」「殺す」そして、「肉体(手・足を折る、頭の皮をめくるなど)に関する語」——特に「死」を——驚異的に多く使い、遂には、²⁴⁾「母子(おやこ)一緒に死んだ方がましです。そうすれば、あの世でも二人頼り合うことが出来ますから」と、当主の奥方で、邸内の一中心たる人物に言わせ、彼女達が、死んでもまだ、「生活する」つもりでいることを、明らかにしている。これは、彼女達が、徹底的に「生きること」を求め、その為には、まわりのすべてに対して、時には自己に対してさえも、利害に当って、その「生きること」を守りぬこうとする——全生物は、それあるが為^リに生きている。その全生物に普遍する「生」への執着——の、強さをあらわすものであり、(1) 彼女らの、その生を希うことの異常な強さこそ、彼女達の利害の源泉なのであったのであろう。と、私は作中のそれに関する語の、異常な多さから、判断したい。

その上で、(2) 彼女達が経済的に被^レ圧迫者であったし、(3) 当時の封建宗法社会制度が、彼女等本来の素直さをのばせぬ環境に追いこんで、あくまでも卑屈であることを強いていた。更に、(4) 往時の各個人は、以上の環境に処しつつ在る先人を見習うことによって、幼い女性達までも、次ぎ次ぎに完全な利害を身につけるようになり、それが(5) 長い歴史・時間の経過によって、伝承され積み重なって、このように発達し、発現したものであろう。

(a) その徹底的な考察、及びやがて、(b) それがどのように発展し、現在及び将来に至っており、また、至るか、その変化の過程と状態を究明すること、及び、(c) 作中の人物の利害の発露の形式が、常にことばそのも

のの利害という形で現われた者は、その末路が完う出来ず、それにひきかえ、心根は数段利害であり、常に利害にことを運びながら、表面のことばそのものは、柔らかに使っていた女性達は、例外なく倖せな生を得ていた。——という三つの課題にあわせ取り組みたいが、残念ながら紙数その他の制約の為、後日、稿を改めたい。

以上、かつて中国在住中、匆忙の間、自ら体験し、また独習したものだけに頼るほかなかった。幸いに掲載の機を得たので、大方の御叱正を賜ることによって、更に一步でも半歩をでも前進したい。切に、諸先輩方の御教導を希う次第である。